

易學指針

全

特 259

308



始



特 259
308



易學士 足立星州 著

易學指針

愛知 日本易學社藏版



はしがき

星州は元來占業者でなし又易占を常に玩び來りし者にてもあらず元法律學を修め暫く學校に教鞭を執り後ち官職に就き官海を遊泳する事實に三十有余年間の久しきに渉る而して最近職を辞して自家に有つて易書を友と爲し専ら放慢生活に身を委ぬる者である

星州は抑も少年の頃よりして頗る劇壇の文藝に興味を持ち何卒致して齡長じては文藝家として世に立たんこの志望を抱き居りしが父が天保年時に生を稟け進化したる現代の虚世上には蓋し適應せざる事少なからず然して家運は急轉直下に陥り尙又我一身を立つる上には唯一の柱石と頼む伯父を失ひ屢々難苦に遭遇したるが爲めに非常なる人生の悲觀を感じ自己の運命の不可解を深

くも憂慮す此に於て志望を一轉して何ぞか致して進路を需めて以て運命の開拓を爲さんご考慮の結果が即ち易學研究の動火線且つは動機となつたのである

易學は往古聖人が精蘊を發して遺されたる哲學合法にして高尚なる無形の學である星州少年時代よりして有らゆる易書を求めて繙き逐年斯學の研究を重ねて見れば實に相像だに及ばざる事理をも發見し得たり此に於て愈々人生の運命開拓は易書又は此法式に依據せざる可からず云ふ事を悟得したのである而して數十年間官途に有る中にも一般同僚及知己の周知する所となり頻りに運命の占事を托する者多く各種人事の百端に付いて大衆の占斷を試み行ひたる所悉く百的百中せり依て愈々人生運命開拓の可能を茲に覺り得たるを以

て尙益々之が研究を持續して大に斯學に没頭せり

儲又藝は身を援ける言ふ古語あり星州自己も斯道に因て一身の善所するに努めしが幸にして天職に離れて活路に彷徨するが如き事もなく餘澤を蒙り居れり尙又星州素より薄學短才なれども過去四十年間斯道に付き螢雪を積み實驗し得たる知識を周く讀者諸氏に分たんとする微意を以てせり

抑も人間は浮沈七度と言ふ俗語もありて人生が此世に生存する上には恰も船夫が海洋を航行する如くで夫れ天候が晴朗にて浪靜穩なる時には多くの海路を辿り走り行く或は烈風激濤にして航海困難なる時は灣沿岸に遁れ止る言ふが如く夫れ人生の運命も是ご等しく凡て善運なる時には其機會を失わず之を攔む可く又悲運に向ひし場合には是を防禦して其苦難を免るゝ方策を構ぜ

ざる可からず之即ち船員が豫め天候を測つて適當なる善所の手段を施すこと
 じ然り而して方今日を逐ふて人事の複雑を極め何時天職を失ふ時機到來する
 かも測り難し失して後の斯道研究修養は既に遅し尙最近之が取締法令の發布
 を見るものご思推せらる此際が極めて修學の好機會にして然して筋肉勞務の
 要なく又晩年に至つての好適業としては之に勝るものやなからん轉ばぬ前の
 杖斯道を學び修得せば敢て失職の言を知らず求職の途に彷徨するが如きは斷
 じて有る事なし

今回新たに本社發行に係る易學指針並に斷易獨學抄及占筮術奧義の三書は本
 社特製の筮竹算木凡ての器具を網羅し且つ又書冊の内容は各章共に文意平易
 簡明頗る要を抜き初心者をして最も會得し易く成學且實行の速成を期せんが

爲めに卷首に於て多少の理論を述べ豫め概念を與へ次に占斷法に關しては苟
 も參考の一端ごもなるべき事柄に付ては細大ごもなく須らく缺くる所なく記
 載爲し有ゆる方法を以て解説を施し愈々實占上の容易ならしめんご努むるも
 のである

自序

卜筮に關する件

卜筮の道は第一には誠敬を専ら主とすべきものであり星州が過去數十年間の
久しく斯道に従事する内に余の許へ或人來りて問ふて曰く私の隣家に易者あ
つて時々占斷を依頼する所が一向に占ふ事柄に的中せぬが故に其易者に向つ
て御前の易は合はぬと告げましたが然し先生に一度御尋ね申すが八卦八段嘘
九段と言ふ古語がある一つ占ふて貰ひたいと思ふ事あるが眞實八卦と言ふ事
は的中するものか如何ですかと殆んど戲笑的の態度で問ふた因つて余は其人
に向ひ答へて曰く夫れなれば一つ易に付いての御話を仕て見ましょ夫れ人
間の身體は天地間の有らゆる森羅萬象を殆んど縮小して現出體となしたるも

二
のである即ち人の頭腦を天ごなして百四十萬余もある毛髮は天体の各星に象
ごり足を大地ごなすされば頭ご足ごの間を宇宙に主る然して左右兩眼を日月
ごなし之を書夜に象ごる鼻より出入する息わ溪谷の空氣ごなし又口より出入
する呼吸の息を空中の風空氣ごなす人體構造の五臟は陰陽の五行に主る肩よ
り上には算へて七つの穴ある之を天体の七曜星になぞらへ手足には十二の節
ありて之を一ケ年十二ヶ月に配し身體に三百余有る筋を三百六十有余日の日
數ごなし筋骨は凡て金銀玉石になぞらへ背は秋冬ごして腹を春夏ごすべく又
人に因つて數に多寡はあれごも皮膚を廻らす一切の毛髮は之を限りなき諸種
の草木に象ごり然して血は海洋の潮ごなし脈膊の動搖を上げ潮又引き潮ごな
す夫れ體內を循環する所の血動脈は人命を保持する所の最も緊要なる一大機

關なりされば血潮の出づる時に人は生れ血潮の引く時に當つて人は死す如此
人間は潮の動搖に同じく脈膊に因て呼吸を爲して生を保つものなれば動物の
一種ご爲すのである

偕又吾人は御互に萬物の長ごして常に誇るご雖も殆んど薄紙一重距つた向ふ
先の事が更に見分けの出來ぬ程の者であるが爲めに複雑したる事柄や錯綜し
た事件が起つた事なれば此事が如何なる風に結着するかと言ふが如き事の判
別の出來得る筈はなし夫れ如此處決に打迷ふ場合に至つた事なれば到底自己
の知能力にては如何ごも即ち白ごも黒ごも判定に苦しみ窮み盡されず茲に於
てか殆んど術なき時の神憑みで始めて神の告を獲る事ごなるのであるされば
苟も占筮者たる者は至誠至敬を以て常に自己の信ずる神に祭祀し無我無心に

て立筮りつぜいし鬼神きじんに通じて人の吉凶禍福きつきょうかふくを前知ぜんちするのである而して又其占筮せんぜいを依頼らいする人も共に些さの疑念ぎねんを打去うちさり筮者ぜいしやと同じく其際に當つては至誠しせいを以て神命めいを聴きく事に努つとむ可きである。こ縷々るる諄々じゆんじゆんと余よが述べたれば彼の卜筮はくぜいの事を問とひし人何某なにぼうは星州前陳せんちんの次第しだいを聴きき易道いさうの窮理きゆうりに深く感服かんぷくなし其際そのさい更に息男そくだんの婚姻こんいんの占斷せんたんを依頼いらいせられたり

昭和八年十一月

著者識

易學指針目次

緒言	一
應用資料	三
十二支の運命概要	六
子年	六
丑年	七
寅年	八
卯年	八
辰年	九
巳年	十
午年	十
未年	十一

申年	十二
酉年	十二
戌年	十三
亥年	十三
九星の運命概要	十四
一白水星	十六
二黒土星	十七
三碧木星	十八
四緑木星	十九
五黄土星	二十
六白金星	二十一
七赤金星	二十二

八白土星	二十三
九紫火星	二十四
五性の適業	二十六
一白水星の適業	二十六
二黒土星の適業	二十七
三碧木星の適業	二十七
四緑木星の適業	二十八
五黄土星の適業	二十八
六白金星の適業	二十八
七赤金星の適業	二十八
八白土星の適業	二十九
九紫火星の適業	二十九

吉凶方位	三十
五行相生相尅	三十九
干支九星本宮圖解	四十
本命的殺方位の事	四十一
厄年の事	四十三
婚姻の相性	四十九
納音の相性	五十一
九性の相性	五十二
十二支の相性	五十四
十干の相性	五十四
胎内の兒の男女を知る訣	五十五
妊婦産所向き方の事	五十六

失物盜難占斷訣	五十七
賣買取引上の口訣	六十
病氣占口訣	六十二
陽卦陰卦の象義	六十七
陽卦の部	六十七
陰卦の部	六十七
上卦下卦の意義	六十八
八卦各象義	七十
乾に屬する象義	七十
兌に屬する象義	七十
離に屬する象義	七十一
震に屬する象義	七十一

異に屬する象義……………七十二

坎に屬する象義……………七十二

艮に屬する象義……………七十三

坤に屬する象義……………七十三

算術易占法口傳……………七十四

應對占法口傳……………七十八

占筮法の概要……………七十九

三畫卦橫圖凡例……………八十一

六畫卦縱圖凡例……………八十二

目次終

易學指針

足立星州著

緒言

天地間事物の廣大なる尙且深遠なる事は殆んど物理極まりなき言ふべきである然りと雖も之が事理を説盡なせし此易道の量は又尤も廣くして其體哉遠大にして無盡低なり然して宇宙の森羅萬象悉く之を象と物とに凝せしめて以て其物情を人に曉らしめ周く象を觀て知悉せしむるものである夫れ如此なるが故に如何に天下の事物隱深を究むることも壁易爲す可からず又如何なる紛擾を釀成すも雖も易道蘊にして實に千變萬化究まりなき鑑識力は蓋し神秘相容れざるはなく且又包藏せざる哉必然なり而して易は天地の道なり天地の道

乃ち陰陽なり陰陽の道廣大無邊にして凡百の事理悉く具備するものご謂ふ可し

儲又宇宙の有らゆる森羅萬象を大別する時は之皆陰陽の二氣に外ならず例へば凡て物には表裏あり夫れ天地あつて日月陰陽あるが如く晝あつて夜あり晴あれば雨あり暑あれば寒あり男あれば女あり君あれば臣あり貴あれば賤あり富あれば貧あり長あれば短あり強あれば弱あり善あれば悪あり廣あれば狭あり賢あれば愚あり清あれば濁あり圓あれば楮あり動あれば静あり正あれば邪あり直あれば曲あり明あれば暗あり大あれば小あり白あれば黒あり如此にして影の身に隨ふが如く恰も車の兩輪の如く陰陽は各々孤立獨個の存在を許すべからざるものごす易の書なる宏大にして天地陰陽の道悉く備はり有りて此

事理に基き人をして凶を避けしめ吉兆に趣かしむるを以て主眼となす然して身上の疑惑あるに當つては至誠至敬を捧げて算木筮竹を以て鬼神に質す所以なり但し鬼神の諭告は直接耳朶に聽く能はず然れども卦象を明にして窮理に照し著情に通じて其象を活用なし而して窮理を立て精誠を竭して占する時は恰も命を受くる事響の如し吉凶悔吝明白に卦爻の辭に見はる之輒ち卜筮を通じて神告を獲る方法の教へを成すものごす如此聖教は實に萬世不朽の書にして宇宙最第の大經至尊と稱すべきものなり

應用資料

易斷上に就ては著者多年の實驗上に鑑み日常占事に付最も多數を極むる事項は運勢適業造作轉宅の方位婚姻失物逃亡賣買病氣等にして而して之が後編斷

易獨學抄の豫備知識として總轄的意味に於て左記以下に逐次説示する所の各事柄に付き何度も繰返し熟讀なし研學修養を加へ凡て腦裡に刻み置き愈々占斷を行ふ場合に當つて適當に取捨應用す可き要あり因て左に參考として順次に記載する事とする

但し左に説述する事柄は占斷上には直接關係あらざる如くなれども其の占ふ所の事柄に因つては最も必要あり假令は相場取引或は野球等の勝敗事を占ふ場合には其占ふ所の人の体力知能力の一般を豫め測知するの要あり而して又占ふ所の人の年令は同一なりと雖も各人々の教育の程度又は身の上の境遇に因つては運命の異なるものである例へば寒地の動植物と暖地の動植物とは自ら異なるものにて同じ畠へ同じ如くに肥料を施し耕作することも發育強弱異なるもの有り況んや人間の如き綿密なる機能を有するものは異なる事は當然にして一例を以て示せば同じ所に於て同じ教養を享けても技藝の優劣各心理状態の異なるものであるされば先づ以て占斷を行ふに付ては差當り占ふ所の人の年令を知ると同時に各人の生れ年の性格等を豫知すべき必要あり依て是より左に順次參考資料として摘記するものとする

干支の運命概要

干支と言ふは即ち十干十二支の事である之は固支那に於て古來より發達し來れるものにて凡て天体に象つて査定せしものにて是は計算上或は方位を定むる爲めに用ひたるものなるが然して其時代にあつては寅の事を演じ書し辰の事を賑じ書きて當今で謂ふ所の寅(虎)又は辰(龍)と通俗的に所謂動物に

宛箴め空想動物の名目ではなかりしものである然れども又全く之が何等の意
味なくして如此動物に宛箴めたるものにあらず夫れ寅の年は暴風が起るこ
又此年に生れ人間は荒き氣質を享けて生る・こか云ふ事は如何にも生理學上
より云ふも當然の結果と言ふ可く又辰の年には大降雨あり又は戦争が起るこ
か或は此年に生れた人間は龍の如き性質を享けて居るこか言ふ事は何れも永
年の實驗上統計的に割出して以て取定められたるものなりとす

十二支の性質に由つて運命を辯ず

子年 滋宮

此年生れの人静かにして且つ柔和にして正直なり然して綿密にして氣強く
故に凡て取引掛合事は一步も人に譲らず之を上手に押切るの腕前がある又非

常に節約を重んじ如何に吝嗇この評を受くるこ雖も常に蓄財する事に最も心
掛けるが爲めに福德多く然し慾深き爲めに辱かしめを受くる事あり色情には
可成濃厚にて無益に費し身を誤る事あり藝術を習ふこも成就せず而して此年
生れの人各地を稼ぎ廻り立身出世するものなり

丑年 結宮

此年生れの人柔和にて又氣長にして心は堅固にて殊に忍耐力強く然れども
心の中には怒氣を含む而して一旦常の其柔和氣長の心が破れて怒氣が發した
なれば己れの意思を飽迄も言ひ通すと言ふ性質なり然れども常には言ふ可き
事も言語に發せず凡て物事に偏屈と見へる程の心底なれば人に大に愛せられ
信用を得て引立を受けて幸福なり然して學問を好み何事も忍耐して事に當り

身の榮達を望むが故に後には家名を擧げ立身す可し

寅年 演宮

此年生れの人には義俠心あつて他人には親切にて義理固く又勇氣もあり心が高潔なる氣質備はり活潑である然して心は強情であり度胸強く何事にも恐るゝ事なく然しながら心に表裏あつて怒り易く而して何事も爲す事中庸を得て長上を敬ひ目下の者を愛し援ける是が爲めに人に敬慕せらる藝術には大に上達す此年の人は身に福分多く中年迄は苦勞多く晩年に至つては仕合せよし

卯年 豊宮

此年生れの人には愛嬌あつて心が靜かにて穩かであり然し物事の決斷心が乏しく又物事を等閑に附して打捨置き速に處知せず癖あつて他人の爲めに親切を

施し骨を折れども他人其恩義を思はず之が爲めに損害を受くる事一齊ならず故に福分多けれども利を失ひ而して此性の人には大に酒食を好み且家業を怠る者にて身を誤り失敗を招く因て兎角物事を等閑にせず遅延せしめず業に勵む可く然して此性の人には僧侶には適當なるものなり

辰年 奮宮

此年生れの人には心は誠實なり然れども頗る氣強く心慢勝にて人に負けず嫌ひで怒る心が強く何事も人に敗を取らじ劣るまじとする然して己の意見は飽迄も通すと言ふ我慢心強く又怒る氣質なれば兎角人と和合せず之が爲めに敗れを招く慎む可し然れども義俠心あつて貧者弱者を援けて大に人に敬せられ又心廣く大志を抱き而も物事の機を見る事機敏にして且つ人を指導する才能あ

りて人に信用あり藝術は上達す但し兄弟の縁薄く夫婦の縁も變る事あり
己年 止宮

此年生れの人 人格高潔にて同情心又思慮も深く至つて素直の性質なれども
物事に疑心あり陰鬱性にして嫉妬の心深く又外見柔和に見ゆれども内心短氣
にて之が爲めに身を誤る事あり然れども高尚なる人格者なれば長上の引立を
得て中年後には福分多く官位も上る然し己れ自發的に進んで立身の途を講ず
るでなくて目上に認められて引立を受けて出世を待つ云ふ風にて處世上に
は疎き性質なり然して親兄弟の力を借らず自ら勵みて立身すべし

午年 合宮

此年生れの人 智慧あり所才に長ず爲めに他人と交際も上手にして淡泊の性

質なれば人には信用ある又心は陽氣にて馴れ易くして離れ易く又外面を飾り
財産家の如くに見へを飾るが爲めに散財多く又他人に親切に見ゆれども眞情
心薄く又福分多けれども身に保ち難し兎角言行一致せず又物事怠慢に流れ易
く財を失ふ事少なからず藝術には上達す而して生地を離れ各地方へ稼ぎ廻り
て立身す晩年に至つて安樂なり但し父母妻子には縁薄し

未年 老宮

此年生れの人 孝心深く心實直にして其行ふ事に表裏なく且又智謀に富み謙
遜の心ある性質なり又短氣にして人の意見を容れず失敗を招くに至る然して
謙遜の心あるが故に却つて運氣を失ひ身上の發達を阻害するものなり又常に
心勞ありて身の浮き沈み多く中年迄は運勢よからず心勞多く他の地方へ稼ぎ

廻りて晩年ばんねんに至りて立身たてみすべし

申年さる 緩宮かんきゆう

此年生れの人このねにうまれぬひとは剛氣ごうきにして智謀ちぼうあり且又温厚おんこうにして慈悲心じひしん深く加之か之世才よのさいにも長じ物事ものごとには落付熱心おちつけねっしんにして他人の信用たにんのしんようを受けて立身たてみする人なり然して交際こうさいも上手じょうずにて廣く然れども性質せいしつ氣強ききやうく事に進み過ぎ又失言しつげんにて失敗しぱいを招く事屢々しばしばある且忍耐にんたいに稍乏やとほしく過失かふしを招く尙晩年おんねんに至つては福分ふくぶん多くして一方の長上ながしやうとなり仕合しあはせよし但し又夫婦ふうふの縁變えんかへる事あり

酉年とり 墮宮だきゆう

此年生れの人このねにうまれぬひとは智惠ちゑあり才能さいのうもあり心は素直すなをにて然るに其才能さいのうを善用じやうようもし又悪用あくようもする又凡て物事ものごとに周到しゆうたうにして大望たいぼうを抱き爲めに身には心勞しんろうあり然し己

れの伶俐れいりに委まかして物事を遣り過ぎず才智さいちを善用じやうようする時は人の信用しんよう厚く又事には熱心ねっしん器用きゆうの性質せいしつなれば藝道ぎだうにも大に上達じやうだつす他人の行おこなひには干涉かんしやうを避くべし而して晩年ばんねんに至り大に仕合しあはせよし

戌年いぬ 煉宮れんきゆう

此年生れの人このねにうまれぬひとは慈悲じひの心深く思慮しりよ分別ぶんべつありて且義俠心ぎやくしんありて人には親切しんせつなり人の事に奔走ほんそうす大に他人に信賴しんらいせらる然れども心に怒氣どきを含みて事に當る之が爲めに事失敗じしぱいなる而して又己れの親族縁者しんぞくえんしやの者には稍人情しやうにんじやう薄くして又色慾しよくの道みちには濃厚のうこうなり且常に學問がくもんを好み又處世上しよせいじやうにも長じ福分ふくぶん多くして立身たてみ出世しよせいすべく然しながら心猛たけくして事に進み過ぎるは此性の欠点けつてんなり

亥年み 實宮じつきゆう

此年生れの人ハ心實直にして且潔白にて又才能もあり同情心もありて尙忍耐
力にも富む然して自己の存心を一圖に進まんごす又短氣にして氣強き性格者
なり即ち勇氣あつて己の志望を貫かんごして退く事を知らずされば物事を一
撒心に進まんごして失敗を招くものなり必ず留意すべし但し中年後に至つて
は大に仕合よし

九星の運命摘要

九星と言ふは天体の九つの星の名稱にして然して此九つの各星は何れも特質
特性が有るのであるされば人間も各其九星に該當して生るゝ性格は其各星に
夫々似たる所の特質を感受して居るものごす而して此九星なるものゝ起因は
彼の太陽の光線が霧に映じて七色を呈す是が俗に虹と稱するものにして即ち

白、黒、碧、綠、黃、赤、紫の七色なり此各色を以て左に説示する所の木火土金水
の諸星に象りたる九つの星に配列されたるものなる可し

左に各九星の特質特性を説述す

- 一 白水星は海河瀧溪泉の如くにて北方に位して坎ごなす
- 二 黑土星は田甫の土にて西南に位して坤ごなす
- 三 碧木星は松杉檜の如き大樹木にて東方に位して震ごなす
- 四 綠木星は杜鵑花茶の木にて東南に位して巽ごなす
- 五 黃土星は大地又は城土にして中央に位し八星を支配し坤ごなす
- 六 白金星は山中の鑛にて西北に位して乾ごなす
- 七 赤金星は社會の通貨金銀にして西方に位し兌ごなす

八白土星は鑛山中より出づる金銀にて東北に位して良こんとなす

九紫火星は太陽の火にて南方に位して離りとなす

一 白 水 星

此星は北方に位して坎かん云ふ水星である而して此水は恰あだかも河川かせんの流水の如く常に動き止やまざるもの彼の流水は諸所しよくの岩石がんせきや又は堰せきに行當り遇あひ障害しようがい遲滯ちたいする通り兎角とかく此性しよの人は一生を通じてあらゆる難事なんじに遭遇そうごうし心苦多く艱難かんなんする性にして而して表面ひやうめん柔和にやうわに見ゆれども内心は極きふめて剛氣こうきにて物事人に譲ゆらず爲めに凡すべて取引掛合事等とりひきかけあひあひには大に利りあり然して此性しよは節險せつけんを重みじ身勝みがちにて慾深よくふかく吝嗇りんせやくの誹そしりを受くる而も他人に對しては親切且實意あり尙又器用きようにして業も勵はげむ殊ことに忍耐にんたい力強ちからく家を整ととのふ然しながら氣きが強つよくて我意わがみに募つる時は稍や

もすれば艱險かんけんに陥おちり禍わざわいを受くる事あり兎角とかく水は方圓ほうえんの器うつわに隨したがふの譬たとの如く常に長上の意見しやがに順したがひ實意じついを以て事に進めば引立を得て立身りつしんなし幸福こうふくなり

二 黒 土 星

此星は坤こんにして西南せいなんに位くらいし土星なり而して土は固萬もとよろづの動植物どうしよくぶつを生育せいよくするの徳分とくぶん有りて此性しよの人は一生を通じて金錢かんとには格別かくべつ不自由ふじゆうを感じず其身みに徳分とくぶん多し尙なほ又人に從順じゆうじゆんするの氣風きふうなれば長上の引立を受けて幸運こううんなり然し心陰鬱いんうつにして且又小心せうしんにして偏屈へんくつなり而も内心は剛情こうじやうにて一旦思ひ立ちし事は飽迄あたまにも忍耐にんたいして進んで實行じつこうなし成功せいこうなすの勇氣ゆうきに富む然して此性しよは親族しんぞくの爲めにも世話苦勞せだ多く爲めに損害しやがい不幸ふこうを見る事少なからず兎角とかく此性しよは我意わがみを張らず心温順おんじゆんにして目上の意見しやがに從つて事に進めば立身出世りつしんしゅっせすべく尙又疑念ぎねん心を慎つしみ

事に決斷力を養ふを可こす

三 碧木星

此星は東方に位して震しんさなす震しんは雷らいさなし雷らい即ち聲こえのみ有つて形かたちなし如此かくのごとくにして此性は頗すこぶる剛氣こうきにして決斷けつだんに富む然して物事を一直線いちよくせんに行ひ進まんこする又常に怒氣どきを現あらはす然れども心は極めて實直じつちくにて惡意あくいなく尙又心猛たけくして威勢いせいあり且つ才氣能力さいきりよくを有するが故に如何なる至難しなんの事業じぎふにも屈くつせず努力どりよくなして成功せいこうを見るべき性質せいしつなり然して頗すこぶる眞面目まじめにして熱心事ねつしんじに當るあたるる雖も性短氣たんきにて一氣いちきに事を仕遂しとげんこして之が爲めに失敗しつぱいを招く然れども實直じつちくに努力どりよくするが故に人の信望しんぼう厚くして吉運きちうんなり此星は一生いっしやうを通じて金錢衣食きんせんいしょく等には格別かくべつ不自由ふじゆうを感じず尙又人の頭目とうもくさなるべき威勢いせいあり兎角とかく此性は己れ一個いっごうの

我慢心を以てせず他人たにんに對し温情おんじやうを以てして事を行ひ進すすむ時は立身りっしん榮達えいだつの身みさなる可べし

四 綠木星

此星は東南の方辰たつみ己くらいに位して陰星いんせいなり然して性温順せいおんじゆんにして智能ちのうもあり然れども短氣たんきにして物事に表裏へうり多く又進すすむ事も早く退しりぞくも早はやし凡すべて物事に飽あき易やすく殆ほとんど大風たいふうの如し風は即ち起おこるも早く又風やむも早はやし然して藝術げいじゆつ工作こうさくには上達じやうだつす且人氣かっにんきあり信川しんかうあつて立身りっしんするる雖も而しかも此性の人は人の頭目とうもくさは成り難がたし又心は頑固がんこにして他人の意志いしを容れざる性質せいしつなり兎角とかく此性の人は時々風の起りて又風やむが如く身の上の浮うき沈しずみ多く零落れいらくするるも立身の途みちも早はやし且つ色情しきじやうに溺おぼる、事多く但し此性の人は克己こつき心強つよくして忍耐にんたい力も強く故に成功せいこうも

早し然し物事を苦にして思ひ事絶へず兎角此性の人
は頑固なれば人々争論を慎むべく又物事中途にて飽きて抛棄せず人の意見に逆はず心を柔和にし克己心を以て努力する時は長上の引立を得て立身出世するものごとす

五 黃 土 星

此星は宇宙間に於ける中央に位して各星を支配するの象なり而して此性の人
は頗る大志を抱き且大膽なる氣象具はる爲めに如何に大事起るも雖も恐れず俗に云ふ山崩るゝとも動かさ言ふ如き大丈夫の強固なる精神の持主である然して言語は重くして忍耐力も強く又心の内に秘して大事を語らず言はば寛仁大度の氣風備はる之が爲めに衆人に敬せられて人の頭目となり又高運にして高位に進む然れども反對に衰運なる人は悲惨なる零落の身の上となる所

謂金鐔差すか薦冠るか言ふ諺の如きの性なり且他人には親切にして世話事を好む凡て小事に拘泥せず心は剛氣穩順にして飽迄も己れの志望を貫徹せしむる迄進取的氣象に富む兎角此性の人
は物事を進んで實行するに當りて善惡の表裏を能く熟慮爲し慎重なる態度を以て一身上の善所するときは吉運幸福なり

六 白 金 星

此星は戌亥に位して即ち乾なり而して乾は萬物の始めにして最も尊大高尚なる星なり
とす又此星は一方には賤しき所あり且此性は心頗る堅固なるも又柔和なる所もある然して吉運にして高尚なる性なれば普通の人は氣運の至らざるに事に進み妄動して失敗する事あり是が通俗に言ふ位負けをすると言ふの

である又此性の人は氣品高くして或は風流を好み且我慢心強く遊惰に溺れ易く虚榮心に富む而して此性の人は氣強くして如何なる難事にも屈せず而も温順にして高振らず私情を専らこせず且又利慾に走らず兎角勢に乗じて妄動せず凡て謙讓の態度を持ち徐々こ進むときは必ず事成就して幸福なり

七 赤金星

此星は西方に位して社會通貨の金銀なりこす而して此星の人は人格敏活にして常に爽快なる事を好み何事を爲すも淡泊にして又心素直である爲めに他人に愛せらる然し頗る多辯にして而も藝術には上達して世の人に用ひらる、是が爲めに驕奢に流れ易く且心に慢心強く輕舉妄動を爲す虞あり然し此性の人は衣食共に福分多く身に備わり格別不自由を感じず但し疑念心強くして物事

に忍耐力の乏しき性なり且金錢は餘り身に止まらず兎角此性の人は愛嬌あつて他人を悦ばすものなれども口舌口論を生じ易く之が爲めに身に禍を招く事あり尚又此性の人は表面快活に見ゆれども心は常に陰氣にて男女共に色情には濃厚なり兎角口は禍の基なり常に詞を慎み温順なる態度を以て他人に接するときは信望を得て幸福を得べし

八 白土星

此星は北東に位し丑寅の方位なり而して此星の人は常に節約を守り心實直にして忍耐力強く且又智謀に富む尙心素直にして篤實なり凡ての事に周密にして妄動せず且人を憐むの情あり然して又蓄財心にも富む爲めに一生を通じて衣食等には不自由を感じずして家政を能く整へる性なり但し此性は人に因つ

ては常に健康上に憂慮し樂しまざる者あり兎角此性の人は表面は氣強く且又短氣の如くなるも心柔和にして律義なり然して此の性の人は其性質より見て凡て物事進んで爲す事は宣しからず退き止まるに利しされば餘り一時に事を仕遂げんとするは惡しく却つて身に災害の及ぶものなれば常に慎重にして篤實にし願望は徐々に進んで實行なく成功を見る事に心掛け肝要なり又心を誠實にして自己の分限を辨へ妄動を慎み即ち目前の利益を測らずして時機の至るを待ちて活動せば遂に目的を達し幸福なり

九 紫 火 星

此星は南方に位し且其性は燃火なりとす而して此星の人は極めて智謀に富み且頭腦明敏にして禮儀も厚く且又文才もあり故に自然に徳分具わる然し他人

に對して表面を飾る氣風あり且外面上氣強く見ゆるも内心軟弱にして尙又心勝氣にして短氣なり凡て物事に猛進過ぎて失敗を招く事あり又技藝には達するも物事に飽き易く之が一つの欠点にて尙又此性の人は物事を獨斷にては遂げ難き性なれば凡て才能ある同士を求めて以て事の成功を收むるものなり又此性の人は他人には親しめども心は輕薄なり但し文學は人に秀いでたるの徳あり然れども物事を行ふに付ては最後の締括りなざる事ある之が爲めに失敗に了る事ありされば資力有つて事に適應する同士と謀り堅實に事を斷行する時は成功的確なりとす

五 性 適 業

人は各生れ性情に由つて適當なる業務を撰擇せざるべからず然れども從來行ひ來りし事は敢て變更するに及ばず左に各種に對する適業の一般を記載するものごす

一 白 水 星 の 適 業

此星の人は水性にして金屬類又は木に緣故ある業又は水の類に關係ある業を行へば金水生水生木を相性として吉ごす

- 建築 工業 銀行 時計 金物 鑛山業 酒 油
- 造船 大工 指物 醬油 米の類 醫 神 官

二 黑 土 星 の 適 業

此性の人は土性にして火に緣故ある事又は金屬に關する業を行へば土生金火生土と相性して吉ごす

- 鍛冶 飾 製菓 乾物 紙 印版 陶磁器 醫
- 荒物 塗物 呉服 鑛業 僧侶 軍人 仲買

三 碧 木 星 の 適 業

此性の人は木性にして火に緣故ある事又は水に關する業を行へば水生木とて適當にして發達す

- 穀類 魚 木材 興業師 宿屋 料理 運送 口入
- 陶磁器 湯屋 酒 醬油 大工 指物 油 醫
- 辯護士 農 遊藝 煙草 青物 染物

四 綠木星の適業

此性の人は木星にして三碧木星に同じ

五 黃土星の適業

此性の人は土性にして二黑土星に同じ

六 白金星の適業

此性の人は金性にして土に縁故ある事又は水に關係ある業を行へば土生金
金生水と相性し適當の業なり

- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 酒 | 醬油 | 油 | 酢 | 穀類 | 吳服 | 染物 | 魚 |
| 飾屋 | 土木 | 金屬 | 運送 | 樂器 | 農 | 神官 | 砂糖 |

七 赤金星の適業

此性の人は金性にして六白金星に同じ

八 白土星の適業

此性の人は土性にして二黑土星に同じ

九 紫火星の適業

此性の人は火性にして木に縁故ある事又は土に關係ある業を行へば火生土
木生火と相性して適當なりて吉とす

- | | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 鑛山業 | 農 | 米穀 | 大工 | 指物 | 竹類 | 荒物 |
| 土木 | 袋物 | 官吏 | 油屋 | 藥種 | 唐物 | 陶磁器 |
| 硝子 | 菓子 | 菓子 | 湯屋 | | | |

吉凶方位

吉凶方位と云ふ事は所謂方位の善悪を撰ぶ事である人々願望、建築、動土、婚姻、轉宅、旅行、生産、取引等其他人事百般何事を行ふに付ても方角を撰ぶ事は詢に肝要の事である或人は此方角を撰ぶが如き事は迷信である云ひ殆んど問題にせぬ者もある然し著者も數十年來の實驗であるが方位と云ふ事を等閑に附して事を行ひ凶方位を犯して非常なる不幸災害に遭遇爲したる實例を認めて居るのである

諸方位を撰ぶ事は如何なる理法に據るか云ふ事の研究は凡て人の行動の百般に及ぼすものなれば随つて人事諸般の易占上に關する事が頗る多いのであるされば速成講習の骨子とする所であるから他の問題と異なつて極めて複雑

なる事項を詳密なる説明を施す譯である

抑も此吉凶方位と云ふ事は唯に方角の吉凶を撰ぶ而已でなくて人々相互間の相性吉凶理法も是と同一の意義に解する譯である而して人々各自が其生れ年の十干十二支九星の各性情に適合せざる方角に向つて行動する時は不幸厄難に罹る可く慎む可きである故に人生相性の理は最も忽にすべからずされば人々相互生れ年の十干十二支九星の性情に相性すれば信從親睦し夫婦は和合して何事に依らず通達成就するものである然らば人生各生れ年の干支九星の各性情は如何なる理法に基けば吉に就くものであるかと言へば皆之五行相性相尅の理に因るものである而して又此理は人事百般に緊要なる事柄なれば其意義の主要を左に例を以て解り易く説明を爲す事とす五行と言ふ事は春夏秋冬

ご又四季に應ずる土用この此五氣の働きを名けて五行と稱へるのであつて其譯は春が行けば夏が来る夏が行けば秋が来る秋が行けば冬が来る冬が来る如此環の端なきが如く息まる事のない状態を指して名けたのである左に説明を加ふ

五行相生 木生火 火生土 土生金 金生水 水生木

此五行相生の理左の如くである

儲 木(震)は東(甲、卯の方)に位して春を主ざる之が爲め草木は春暖に逢ひて繁茂する深山の木氣旺にして揉合ひて火を生ず又火(離)は南(丙午の方)に位して夏を主ざる爲めに酷熱す然して又火氣旺にして燃えて灰となり土を生ず凡て萬物土より出て土に歸り入る故に土用は春夏秋冬四季の境界に居る然して又土の氣旺にして鑛山より金を生ず又金(兌)は西(庚酉の方)に位して秋

を主ざる秋風旺にして能く草木を黄み落し殺伐す金氣旺なる所より水を生ず又水(坎)北(癸子の方)に位して冬を主ざる寒氣旺にして氷結す又春に至り暖氣に逢ふて木を發育す如此五氣相生じて息まらざる五行の順を相生吉となすものなり

吉方位

吉方位即ち方角の吉なる事は五行の相生に基くものである木生火 火生土 土生金 金生水 水生木の説である以下に解り易く一例を擧げて説明をなす譬へば三碧木屋四緑木屋の人は九紫火星の方角に向つて宅地の結構男女の配偶等凡ての行動は木生火と相生して吉方位なれば吉に就く又六白金星七赤金星の人は一白水星の方角に向つて行動せば金生水と相生して何事も

成就し吉に就くべし如此人生は其生れ年干支九星の各生情が何れも五行理に基いて行動なせば事通達成功すべし然して又他の各生れ年の生情即ち二黒土星八白土星の人皆此五行理に據つて行動すれば何れも事順調に運び功を遂ぐべしされば他の干支九星の各性情は右同一の理なれば押して知る可きなり

而して又曆に現はす如く歳徳神(恵方又は間の方とも言ふ)又は天道神天徳神の巡りたる方位は之は五行理に據らざる吉神にして凡て人生何事の行動に付ても吉兆を現はすものこそすされば仮令此吉神の巡りたる方位が凶方位に當る干支九星の性情なりとても凶事消滅して吉に就くものなりこそす

凶方位

凶方位即ち方角の凶なる事は吉方位と同じく五行相尅の理に基くものである
る 木尅土 土尅水 水尅火 火尅金 金尅木の説である而して

此五行相尅の理は五行相生理の逆にして四時の序に悖るを以てである人生宅地の結構男女の配偶其他人事百般の行動が五行相尅の理に合致するときは不幸災害に罹るものである以下に一二の例を擧げて説明をなす

譬へば六白金星七赤金星の人が三碧木星四緑木星の方位に向つて行動せば金は木を切り割く即ち金尅木と相尅して凶方位であるから厄難に罹り又は失敗を招くされば六白金星七赤金星の人は三碧木星四緑木星の方位に向つて行動は誠むべし而して男女配偶他交際取引關係は相互信従和合せず或は彼我敵視し稍もすれば鬪伐するに至る事あり慎む可し其他九紫火星の人は

六白金星七赤金星の方位に向つて行動せば火尅金と相尅して凶方位であり
 又一白水星の人九紫火星の方位に向つて行動せば同じく水尅火と相尅して
 共に凶方位である何れも凶方位即ち相尅の方角に向つて行動をなせば上述
 の如く禍を招き不幸を見るべきなり尙又他の干支九星の性情皆此五行相尅
 の理に基きて能く考慮し凶方位を避くべく押して知る可し
 儲又以上五行相尅説の外曆に現はす所の暗剣殺五黄殺の巡りたる方位は人
 生の一大凶方位なれば此方角に向つて行動し犯すときは立所に災害起る可
 く又歳破に當る方位は同じく凶方位なれば此方角に向つて百般の行動は共
 に誠むべし

尙茲に再説し注意して置く

九星 一白水星 二黒土星 三碧木星 四緑木星 五黄土星

六白金星 七赤金星 八白金星 九紫火星

十干甲乙(木)丙丁(火)庚辛(金)壬癸(水)戌己(土)十二支亥子(水)丑(土)寅卯
 (木)辰(土)巳午(火)未(土)申酉(金)戌(土)

而して人生の吉凶方位に付ては前述の如く曆に現はす通り年は毎年月は毎月
 日は毎日時刻は毎時事に九星の各干支宮へ巡行に因つて即ち干支と九星とを
 一致せしむるものごす例へば前年の干支が癸酉にて九星が四緑木星なれば今
 年が干支甲戌にて九星が三碧木星なり又明年が乙亥にて九星は二黒土星なり
 而して月の九星は成年は旧正月が五黄土星二月四緑木星にて日は又冬至に近
 き日の申子一白水星にして雨水の月癸酉七赤を起す如此年月時刻何れも九星

の發起はつきてん点は異なること。雖も何れにしても九星が各干支の宮内へ巡り入りたる所を五行説に基もとき木火土金水の相生相尅の理りを推究すいきゆうして人事百般行動の吉凶を決けつす可べきものごす他の九星干支相生相尅の理一般押して知る可し

五行ごぎやう（木火土金水）相生相尅そうしやうそうこく

木生火 深山の諸木揉合もみあひひて火を生ず 相生じて吉

火生土 火は灰はいとなり土を生ず 相生じて吉

土生金 鑛山土より金を生ず 相生じて吉

金生水 金氣旺かねけさかんなる所より水を生ず 相生じて吉

水生木 水の作用さようにて諸木生育いくす 相生じて吉

木尅土 木の根は土を破やぶる 相尅あいくして凶

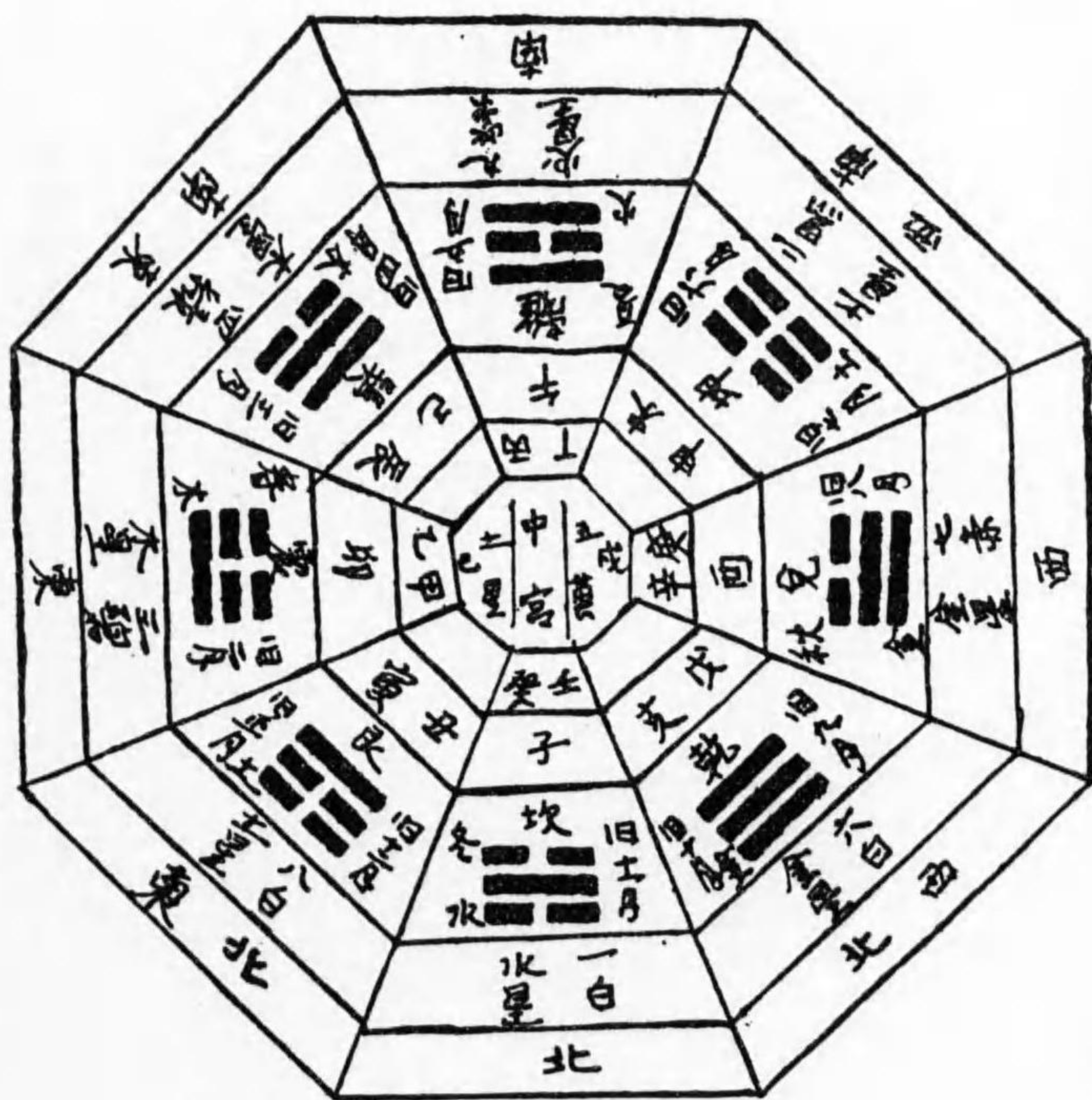
火尅金 火は金を燒やき解とく 相尅して凶

土尅水 土は清せい水を濁にごす 相尅して凶

金尅木 金は木を切り割きく 相尅して凶

水尅火 水は忽たちまちにして火を消けす 相尅して凶

八卦方位圖解
干支九星定方位圖



本命の殺方位の事

本命の殺と言ふ事は何人も知る人生の凶方位を現すものにして此三者共に人事百般事を行ふに付ては最も大凶方位となすべくされば此方位に向つて願望造作婚姻轉宅諸取引等凡て何事に依らず事を行ひ犯す可からず若し此方位に於て事を行ひ犯すときは一命を失ふ事もあり又は厄難病難損毛等に罹る事多し然して本命は月星の援助もありと雖も的殺の方位にて事を行ひ犯す事は絶對に之を誡めざる可からず

本命的殺の方位は下圖に依つて知る可し

本名は各自己の年令の記載爲し有る所が即ち本命でありて其向ふに當る方位が的殺なり例へば各自己の年令が北の方位に記載爲しあれば此所が本命にて南の方位が的殺なり又各自己の年令が西の方位に記載しあれば此方位が本命にて東の方位が的殺なり他は押して知る可し



厄年の事

各人々の九星本命星は毎年各宮へ循環するものにして然して各自の本命星が左記九星轉盤圖の如く朱線宮内へ巡り入りたる年は何れも厄年なれば新たに事業に進まず凡て旧を守りて妄動せず慎む可く而して又左記圖示する如く例へば三碧木星の人の如く自己の本命星が中宮(中央)へ巡り入りたる年は所謂八方塞りにて厄年なり尙又各自の本命星が艮宮坤宮坎宮へ巡り入りたる年は同じく厄年なれば事に進まず慎む可きなり

九星轉盤圖



九星轉盤圖



九星轉盤圖



九星轉盤圖



九星轉盤圖



婚姻の相性

占斷上に於て此縁談の占ひは頗る其數多し然して縁談の占ひに付ては先づ第一男女の相性吉凶を觀るべきである夫れ相性の吉凶は最も大切なるものにして相性凶なるときは夫婦死別したり或は厄難に遭遇し又は一家の盛衰に關するものなり

而して之が相性法は左記に列記する如く納音の相性九星の相性十干の相性十支の相性此四法に基くものにて然して四法共に前段の吉凶方位の章に於て説明せし如く是皆何れも五行の相性相尅の理法にして即ち水生木、木生火、火

生土、土生金、金生水、以上の如く假令は納音の相性法にて水性の男子なれば
 金性の女子は金生水と相生して吉又九星の相性法にて一白水性の男子には七
 赤金星又は六白金星の女子とは同じく金生水と相性して吉而して水性の男子
 に火性の女子なれば水尅火と納音の相性大凶九星にても同じく一白水星の男
 子に九紫火星の女子は水尅火と相性大凶なりとす尙又十干十二支何れも此理
 法に基くものにして然して縁談の相性吉凶は右四法に依つて定む可きものな
 りと雖も然れども男女の相性四法に一致せしむる事は甚だ至難の極みなりと
 れば四法中に於て何れか一方の相性法を範として縁組を爲せば可なり然し就
 中四法の中にて納音の相性法に最も重きを置くものとす即ち左記の通り

納音の相性

木性の男子

火性の女子大吉
 水性の女子大吉

金性の女子大凶
 土性の女子大凶

木性の女子半凶

火性の男子

土性の女子大吉
 木性の女子大吉

水性の女子大凶
 金性の女子大凶

火性の女子凶

土性の男子

金性の女子大吉
 火性の女子大吉

水性の女子大凶
 木性の女子半凶

土性の女子半凶

金性の男子

水性の女子大吉
 土性の女子大吉

火性の女子大凶
 木性の女子大凶

金性の女子凶

水性の男子

木性の女子大吉
 金性の女子大吉

火性の女子大凶
 土性の女子大凶

水性の女子半凶

九星の相性

一白水星の男子

六白七赤の女子大吉
一白の女子吉
三碧四緑の女子吉

二黒五黄八白の女子大凶
九紫の女子大凶

二黒土星の男子

九紫の女子大吉
六白七赤の女子大吉
二黒五黄八白の女子吉

三碧四緑の女子凶
一白の女子凶

三碧木星の男子

一白の女子大吉
九紫の女子大吉
三碧四緑の女子小吉

六白七赤の女子大凶
二黒五黄八白の女子凶

四緑木星の男子

一白の女大吉
九紫の女子大吉
三碧四緑の女子小吉

六白七赤の女子大凶
二黒五黄八白の女子凶

五黄土星の男子

九紫の女子大吉
六白七赤の女子大吉
二黒五黄八白の女子小吉

三碧四緑の女子大凶
一白の女子凶

六白金星の男子

二黒五黄八白の女子大吉
一白の女子大吉
六白七赤の女子小吉

九紫の女子大凶
三碧四緑の女子小凶

七赤金星の男子

二黒五黄八白の女子大吉
一白の女子大吉
六白七赤の女子小吉

三碧四緑の女子凶
九紫の女子大凶

八白土星の男子

九紫の女子大吉
二黒五黄八白の女子吉
六白七赤の女子大吉

三碧四緑の女子大凶
一白の女子凶

九紫火星の男子

三碧四緑の女子大吉
二黒五黄八白の女子大吉
九紫の女子小吉

一白の女子大凶
六白七赤の女子凶

十二支の相性

寅卯の男子	子亥の女子大吉
己午の男子	寅卯の女子大吉
辰未の男子	己午の女子大吉
子亥の男子	申酉の女子大吉

戌丑の男子	己午の女子大吉
申酉の男子	戌丑の女子大吉
申酉の男子	未辰の女子大吉

十干の相性

甲乙の男子	戊己の女子 吉
丙丁の男子	庚辛の女子 吉
戊己の男子	壬癸の女子 吉
庚辛の男子	甲乙の女子 吉
壬癸の男子	丙丁の女子 吉

甲乙の女子	庚辛の男子 吉
丙丁の女子	壬癸の男子 吉
戊己の女子	甲乙の男子 吉
庚辛の女子	丙丁の男子 吉
壬癸の女子	戊己の男子 吉

胎内の兒の男女を知る口訣

母親の年丁の年に孕みて翌年舊五月節句より前が臨月なれば生れる兒は男子なり又舊五月節句より後が臨月なれば生れる兒は女子なり而して又母親の年
 半の年に孕みて翌年舊五月節句より前が臨月なれば生れる兒は女子なり又舊五月節句より後が臨月なれば生れる兒は男子なり母親の年仮令丁なるこ又半
 なるこを問はず丁の月舊曆に孕みたなれば生るゝ兒は男子なり又半の月に孕
 みたれば生るゝ兒は女子なり而して又日にては舊曆の十五日前に生るゝ兒は
 男子にて十五日後に生るゝ兒は女子なり

妊婦産所向き方の事

正月は未の方 吉	二月は戌の方 吉	三月は丑の方 吉
四月は未の方 吉	五月は辰の方 吉	六月は午の方 吉
七月は未の方 吉	八月は未の方 吉	九月は申の方 吉
十月は申の方 吉	十一月は戌の方 吉	十二月は丑の方 吉

而して凡て歳徳神の宿れる(恵方)方

に向へば吉とす

但し上記は旧暦を用ゆ



失物又は盗難に付ての占断訣

失物の占ひは頗る其數多し而して之が占断は甚だ複雑なるものにて其之を占ふに付ては先づ以て占筮に先だち失物は紛失なるか又は盗難なるか然して失物は晝なるか夜なるか但し盗難とせば賊は男なるか女なるか近き所の者の所爲か遠所の者の所爲なるか賊の隠るゝヶ所並に金品の有る場所尙物品は出て手に入るや否や以上凡ての事實の一般を占断する上に付いて盗難とて必要なる事柄を参考として簡明に左に大体を説示するものごす

一子の日の失物が盗難なれば西の方女取りて山林に置なり

一丑の日の失物が盗難なれば西の方男取りて戌(西北)の方に置なり

一寅の日の失物が盗難なれば戌(西北)の女取りて(北の間)子の方に置なり

一卯の日の失物が盗難なれば辰の方(東南)の男取りて戌亥(北西)の間に置
なり

一辰の日の失物が盗難なれば午(南)の方女取りて西の方家に置くなり

一巳の日の失物が盗難なれば子(北)の方女取りて酉(西)又は子(北)の方に置
なり

一午の日の失物が盗難なれば亥の方(西北)童子取りて北の方林の中に置なり

一未の日の失物が盗難なれば丑の方(東北)人取りて東の方岩屋に置なり

一申の日の失物が盗難なれば東の方女取りて北の方又は申酉(西南)の間に置
なり

一酉の日の失物が盗難なれば西の方男取りて人の手に渡す

一戌の日の失物が盗難なれば法師取りて亥(北西)の方に置なり

一亥の日の失物が盗難なれば申(西南)の方下部取りて巳(南東)の方に置なり

賣買取引上の口訣

定期米並に株式取引上の相場高低判断

九星に基く日々の相場高低秘訣

一 水星の日 此の日は坎と言ふ日なり

坎の日の本質は相場初め下り後に上る

二 黒土星の日 此の日は坤と言ふ日なり

坤の日の本質は相場上り下りなし保合にて動かす

三 碧木星の日 此日は震と言ふ日なり

震の日の本質は相場初め上る風にて後に下る

四 緑木星の日 此の日は巽と言ふ日なり

巽の日の本質は相場保合にて上る風にて動かす

五 黄土星の日 此日は中宮と言ふ日なり

中宮の日の本質は相場上り下りなし動かす

六 白金星の日 此日は乾と言ふ日なり

乾の日の本質は相場一時高値を現はし大体強氣なり

七 赤金星の日 此日は兌と言ふ日なり

兌の日の本質は相場保合なれども底意は安し

八 白土星の日 此日は艮と言ふ日なり

艮の日の本質は相場一時高値後安し相場粘り

九 紫火星の日 此日は離と言ふ日なり

離の日の本質は相場始め高く後に安し

病氣の占 又咎の事

病氣は其發生の日に由つて男女各輕重の差異あり然して占斷上之を豫測する
必要あり左に説述す

子の日發病は男子は重く女子は輕し殊に朝五つ時午前七時八時の發生なれば大
切なり頭に病あり男子は酉の日大切なり女子は此日より稍快方に趣く北東男
子の呪ある

丑の日發病は男子は重く女子は輕し酉の日稍快方に趣く西又は北方氏神の咎
め

寅の日發病は男子は重く女子は輕し手足に病あり北西又は東南の神の咎め

卯の日發病は男子は輕く女子は重し腰又は足に病あり母方の氏神の咎め未戌
の日稍快方に趣く

辰の日發病は男子は重く女子は輕し頭又は腹の病あり南方土公神の咎め申戌
の日稍快方に趣く

巳の日發病は男子は輕く女子は重し九日を過ぎて稍快方に趣く氏神の咎め
午の日發病は男子は重く女子は輕し胸又は腹の病ひ戌の日稍快方に趣く母方

の靈の呪

未の日發病は男子は輕く女子は重し丑又は未の日稍快方に趣く但し養生を怠
らば漸次に病氣は長し

申の日發病は男子は輕し女子は重し氏神のこがめ酉又は子の日稍快方に趣く

酉の日發病は男子は輕し女子は重し手足の病ひあり酉又は南の方大神の咎め
 戌の日稍快方に趣く
 戌の日發病は男子重く女子輕し男子は寅の日大切女子は己の日稍快方に趣く
 人の地に付きて呪ひある
 亥の日發病は男子は輕く女子は重し丑寅の日病勢加はるか快方に趣くか分れ
 目東又は南の方神の咎め

易占

陽卦陰卦の象意

此陽卦陰卦の象意は占斷上最も必要なり

陽卦の部 乾震坎艮の象意

天男剛高貴尊大正晝直長清強善仁進昇

多實動明廣白骨圓上伸先富晴陽健顯暑

遠

陰卦の部 坤巽離兌の象意

柔弱靜賤下少小夜貧缺典柘醜後退狹短

縮急卑降虛邪受濁暗隱寒黑瀆女陰近低

上卦下卦の意義説明

(卦の字は卦とも云ふ)

上卦下卦の意義は占斷上極めて重要な事なり

上卦は外卦とも云ひ又彼とも言ふ下卦は内卦とも云ひ又我とも言ふ

上卦は上の卦の事にて下卦は下の卦の事にて格別深き意義なし

外卦は外部の事にて所謂他家又は先方の相手と云ふ意なり又内卦は内

部の事にて所謂自己又は自家の事なり例へば婚姻の占斷なれば外卦は相手

方先方の謂にして男の自家より云へば女の方を指して云ふ意にて女の方よ

り云へば男の方を云ふ意なり又失物の占事なれば外卦は失せし金品にして

内卦は自己即ち失ひし人を云ふ又病氣の占ひなれば外卦は病症の事にして

内卦は自己の身軀を言ふ

彼は先方の相手方を指す謂にして我は自己の方を言ふ之を要するに上

卦は凡て向ふ相手の事にて下卦は我事を言ふ而して此區別は斷易上最も活

法の基なれば深く研究を要するものこそす左記圖示に依り一般を推知すべし



上記の如く爻名は下より順次上へ算へ上るものこそす即ち初爻二爻三爻四爻五爻上爻と稱すべし

八卦象義

八卦各卦には夫々特種の所屬象意ありて其又意義甚だ廣し之が即ち占事には活斷上の要義なり

乾に屬するもの 數は四、九、一、

天象は 太陽 月 霰 雹 氷 人物は 君主 大人 父 師匠 老男 長者

名士 官位ある人 夫

地理は 東京 大阪 京都 名所 山川 居所は 官公署 二階 驛舎 高堂

人體は 頭 顔 肺臟 筋骨 首 動物は 龍 象 馬 犬 猫 鼬 鯉 虱

獅子 鴨 物品は 帽子 鏡 寶玉 穀物 色は白赤

兌に屬するもの 數は二、四、九、

天象は 星 月 雨 雪 露 霰 人物は 少女 妾 歌妓 人體は 口 舌

肝臟 咽喉 地理は 澤 池 水邊 居所は 墻壁 動物は 羊 猿 海中の

物 物品は 金物 佛具 衡器 紙 筆 文書 色は白

離に屬するもの 數は三、二、七、

天象は 日 虹 霞 晴 人物は 中女 文人 軍人 人體は 心臟 眼 大腹

地理は 森林 田地 居所は 宮 社 明り窓の有る所 物品は 帽子 紙 筆

書籍 硯 甲冑 鐵砲 動物は 龜 蟹 鼈 螢 蛤 雉子 植物は 花木

色は赤 紅紫

震に屬するもの 數四、三、八、

天象は 雷 浮雲 人物は 長男 賢人 祭主 醫者 人體は 足 髮 地理

は 竹林 市街 居所は 樓閣 動物は 龍蛇 飛鳥 鶴馬 獸物
 品は 鮮肉 菓子 竹木 電氣 色は 青黄
 巽に屬するもの 數は五、三、八

天象は 風 霰 雨 人物は 長女 秀才女 僧尼 人體は 肱 股 氣
 地理は 海川 花園 動物は 鶏 蛇 蟲 禽 居所は 會合 物品は
 竹木 扉 鏡 袋 巧器 香物 舟 塗物 紙 色は 白 青 綠
 坎に屬するもの 數は一、六

天象は 雨 雪 霜 露 水 人物は 中男 舟人 盜賊 盲人 浪人
 地理は 湖 池 沼 泉 井 水邊 居所は 宮 寢所 人體は 耳 血
 腎臟 動物は 豕 魚 狐 馬 水中の者 物品は 弓 冷物 鐵器 酒

海の者 植物は 茨 色は 黒

艮に屬するもの 數は七、五、十

天象は 雲 霧 嵐 人物は 少女 神官 人體は 手 指 骨 背 胸
 脾胃 地理は 山岳 名所 墓地 居所は 門 社家 動物は 狗 虎
 狐 鼠 百禽 物品は 石 植物は 藤 瓢 色は 黄


坤に屬するもの 數は八、五、十

天象は 雲 霧 人物は 皇后 母 庶民 臣 妻 凡人 小人 老女
 伶人 農人 人體は 腹 脾胃 肉 地理は 平地 田野 古跡 居所は
 村舎 倉庫 動物は 牛 牝馬 百獸 物品は 布 絲 綿 車 釜
 五穀 馬鈴薯 袴 腐草 色は 黄

算術易占法口傳

此算術占法々式を茲に公開する理由は外出旅行又は自家に有つても突嗟の場合にして算木筮竹を所持せざる時に當つて天時願望勝敗病氣失物其他百般の事柄を占ふに付き鉛筆にて算用數字を用ひ紙片に左記説明する方式に由つて書き誌し即ち筆紙を以て簡便に而も完全なる占斷を行ふ方法である但し此算術占法も世に行わるゝ方式數種ありと雖も最も分り易き方法を説明なす事とする而して既に前章に於て説述する如く易六十四卦は何れも上卦下卦に由つて一卦名を成立する事を知得すべし儲算術占法に由つて卦を得る方式は左の如し

最初上卦を得るには其占ふ時の旧曆にて年月日を合算し此數を八つづつ八々(八卦の事)と拂ひ除き残りの數字を以て卦を起すべきものこそす

例へば今占ふ時が辰年の八月十四日七ツ時なれば子は十二支の始めなれば子を最初の一數として算へ夫れより順次に子丑寅卯辰と算へれば即ち五番目(5)なり夫れへ八月(8)十四日(14)を加へ入れば合算して二十七數と成る是を三八二十四と八つづつ(八々)拂ひ除けば三(3)が残る離  の卦を得たるものにして之を以て上卦とす

次に又下卦を得る方法は左の通り

下卦を得るには其占ふ時の年月日に尙占ふ時の時刻を差加へ但し旧曆の日にて合算して其數を八々と八つづつ(八卦の事)拂ひ除き残りの數を以て卦を起すものこそす例へば前述の上卦を得たる時の方法と同じく其占ふ時が辰年の八月十四日七ツ時(午后三時同四時)なれば子は十二支の始めなれば子を始めの一數として子丑寅卯辰と算へれば五番目(5)にて夫れへ八月(8)十

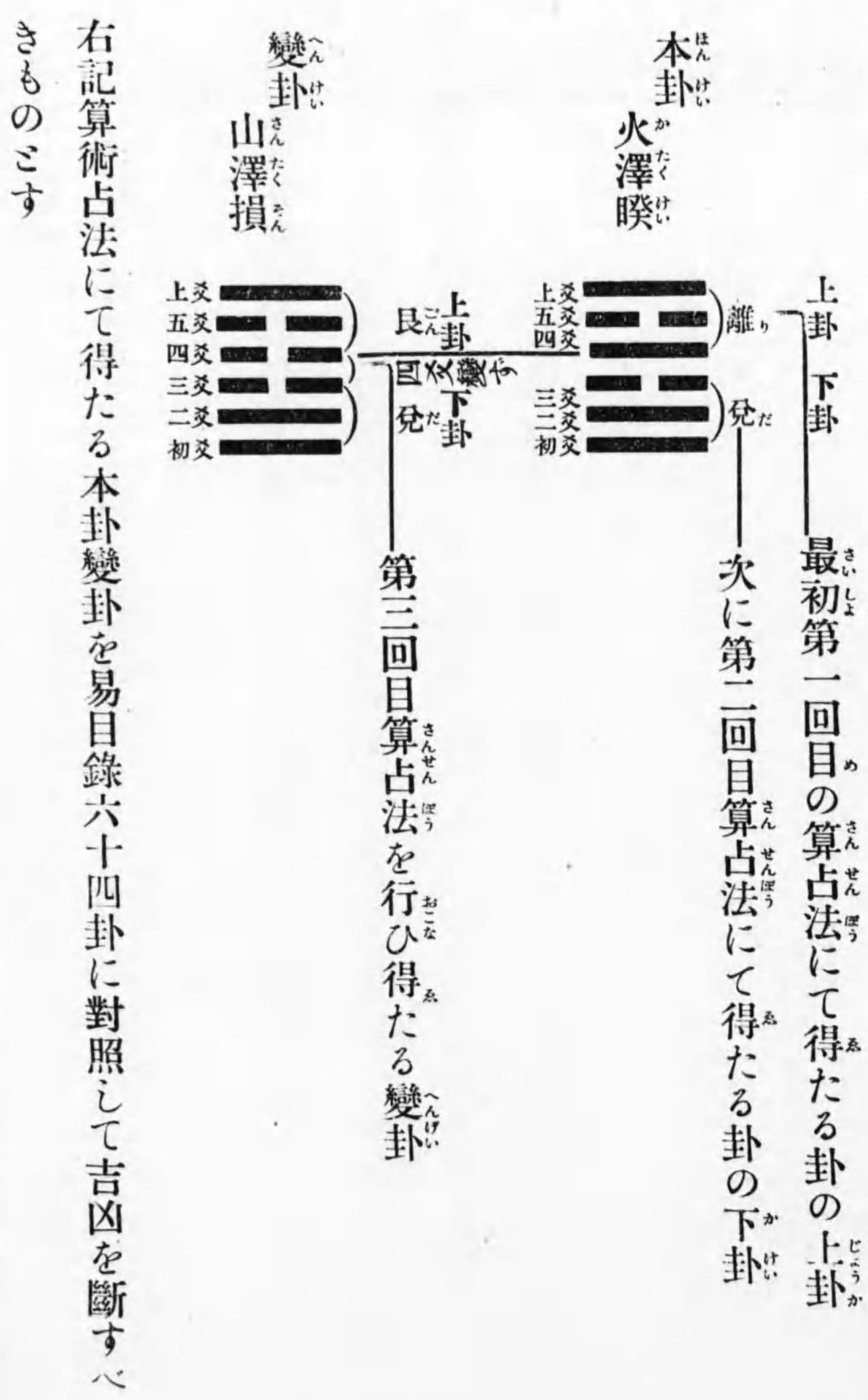
四日(14)を加へ尙又は七つ時(7)を差加へ合算すれば三十四數なる是を四八三十二と八つづつ々(八卦)拂ひ除けば残り即ち二(2)となり兌の卦を得たるものなれば之を以て下卦となす

以上二回の算術占法を行ひ本卦は易目錄六十四卦中の火澤睽の卦を得たるものなり後に圖示説明す



次に變卦を得る方式左の通り

變卦は前述本卦の下卦を得たる合算數即ち辰年の(5)に八月の(8)十四日(14)七つ時(7)の總數を合算したる三十四數を今度(變卦)は五六三十三と六つづ、拂ひ除きたれば四(4)残る此四數を以て本卦火澤睽の四爻變となし茲に於て變卦は易目錄六十四卦中の山澤損の卦を得て全く一占事の算術終了なせしものなり左に圖示して説明す



右記算術占法にて得たる本卦變卦を易目錄六十四卦に對照して吉凶を斷すべきものなり

應對占法口傳

願望其他掛合事等に付他人との應對占法

乾 ☰ の上卦を得たれば彼は彼(先方)強情にて取合はざる象

兌 ☱ の上卦を得れば彼は我に従へ共意思柔弱にて事遂げず

離 ☲ の上卦を得たれば彼は事を明察疑議して事調はず

震 ☳ の上卦を得たれば彼は我に應ぜず逃ぐるの象

巽 ☴ の上卦を得たれば彼は我に背きて應ぜざる象

坎 ☵ の上卦を得たれば彼は艱あつて我に應じ難き象

艮 ☶ の上卦を得たれば彼は我に拒んで應ぜざる象

坤 ☷ の上卦を得たれば彼は意思柔弱にて事果さざる象

上卦下卦

例示



上圖の如く我より進んで談合すれども彼は口を背けて向ふに
て應ぜず逃ぐるの象なり

占筮法概要

以下に於て遂次解説する事項は占術上に直接必要なる事柄而已にして此易學
指針研學の場合には敢て必要を感じざる如く然れども後編斷易獨學抄研究の
際に於ける之が豫備知識涵養として左に占術上の一般概要を説示するものな
れば讀者に於かれても今より進んで斯學の研讀に一段の意を用ひらるべきで
ある

抑も易斷占術上の法式としては本筮法中筮法略筮法と如此三法式あり而して
之が仕様法式は尤も區別があり然し中筮法以上本筮法式の解説は複雑なる法

式にて初心者にして速成習得は容易ならず而して易は固より古語に曰く「至誠之道可以前知」又「至誠者通於神」ある然して今一度に總ての占術を修得は蓋し至難の極みなり著者多年の實驗に鑑み先づ以て今世間一般に行わるゝ所の方式にて嘗て彼の易學の大家高島嘉右工門氏の常に行使せられたる略筮法に則りて普く讀者をして易占術の速成を畫するものなるが故に諸氏は畧筮法の占術を萬全なる會得熟達せし上にて御入會後三ヶ月目に提供爲す中筮法及本筮法の研學著書に因つて研究修養の功を積み以て愈々斯道の秘蘊を知得せられん事を要望するものなり

諸此畧筮法に基く占斷法は別冊斷易獨學抄に於て細説を施しあれば茲には初心者に對して占術上の豫備知識教養として易卦の象義概要を説き現わすもの

とす左記の如く各卦の眞數即ち一は乾二は兌三は離四は震五は巽六は坎七は艮八は坤此八卦の號數は之が占術上の一大要素なれば深く研究會得すべきものである

八卦三畫卦橫圖凡例(天地人)



三畫卦橫圖凡例



六畫卦縱圖凡例



六十四卦卦名は悉く皆以上の方法にて構成するものなれば他は推して知る可し

以上縷記する所に因つて易學指針の解説は茲に完結を告ぐ而して本書の目的は後編斷易獨學抄の占斷法講習の豫備知識教養にして例へば運勢の占法に付ての研學は干支九星の各生れ年性情を説き造作轉宅等の占法研學は方位吉凶を説き婚姻に付ての占法研學は相性理法を説き又失物病氣等の占法に付ての研學は凡ての参考事項を説き尙卷尾に於て占筮法の研讀準備として算術占法及び筮法の一端を説き即ち易占法の大要を説述なせしものなり

易學指針終

昭和九年三月廿五日印刷
昭和九年四月七日發行

不許
複製

著者兼發行者 足立房次郎

印刷者 加藤東三郎

愛知縣一宮市明治通四丁目二番地

印刷所 清交社印刷所

同所

發行所

愛知縣丹羽郡岩倉町
大字岩倉字北口上郷十四番地

日本易學社

終

